世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Trends in the Part-time Employment of University Students in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩田, 弘三 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/895

大学生のアルバイト目的と学業

岩　田　弘　三

論文要約

学生援護会などの調査をもとにすれば、少なくとも1992年以降、アルバイト目的として「社会勉強のため」という理由をあげる学生が増加し、90年代後半期には、「小遣いを増やすため」という理由についで、第2位のアルバイト目的にのしあがってきたとされる。それでは、「社会勉強のため」にアルバイトをしている学生とは、はたしてどのような特徴をもったグループなのだろうか。「小遣い稼ぎ」目的でアルバイトをしている学生グループに比べて、どのように異なる特徴をもつ集団であるのだろうか。この点の解析を主な問題関心としながら、とくに学業との関連で、最近の学生アルバイトの実態を明らかにすることが、本論の目的である。その点に関する分析を進めるために、本論では、2003年に全国12大学の学生を対象として実施した、アンケート調査にもとづくデータをもとに、解析を行うことにした。

キーワード：学生アルバイト、学業

1．はじめに

文部科学省の『学生生活調査報告』をもとにすれば、2002年には大学生のうち、「授業期間中に恒常的にアルバイトに従事している学生」の比率は、37.7%に達している。それに、「長期休暇期間中だけの」および「授業期間中の臨時的な」アルバイト従事者を加えて、1年間に何らかの形でアルバイトを体験した学生の比率（以下、単に「アルバイト従事率」と呼ぶ）についてみれば、76.8%にもなる。さらに、アルバイト従事学生だけを取り出した場合の、そのアルバイト年収額（実額平均：2002年度は約47万円）をみると、学費や生活必要経費などを含めて、学生が1年間に支出した学生生活費支出全体の23.1%と、実に約4分の1の規模さえ占めている。しかも、「家庭からの給付のみで修学可能」なアルバイト学生、つまり経済的には必ずしも働く必要を感じていないアルバイト学生の比率は、全学生（アルバイト非従事者23.2%を含む）のうち、29.7%を占めているのである。このようにアルバイトは、学生たちへの浸透度、さらに、それをとおして手に入れる金額の規模からみても、いまや経済的にも文化的にも、学生生活のなかで大きな比重を占めるようになっていることが分かる[1)]。

それでは、学生のアルバイト生活の現状・実態は、いかなるものであるのだろうか。また、アルバイトは、他の学生生活・活動、とくに学業にどのような影響を与えているのだろうか。以下、

2003年に全国12大学の学生を対象として実施したアンケート調査にもとづいて、検討していくことにする。調査の概要については、『12大学・学生調査―1997年と2003年の比較―』に詳細が記されているので、そちらを参照されたい[2)]。

今回の調査では、アルバイトに関する質問項目としては、(1) アルバイト従事期間、(2) 平日におけるアルバイト従事時間、(3) これまでに経験した主要なアルバイト職種、(4) 1カ月当たりのアルバイト収入額、(5)アルバイト先を選ぶときの決め手となる条件(アルバイト選択条件)、(6) アルバイトをする目的・理由、(7) 現在の生活のなかでのアルバイトの比重・重視度、の7つが含まれている。そこで、本報告では、それらの項目を中心に分析を進めていくことにした。

これら項目のなかでも、以下のような理由で、今回とくに注目するのは(6)である。アルバイト目的に関する調査で、「社会勉強のため」という項目が、選択肢の一つとして新たに登場するのは、1992年以降のことである。だから、それ以前に、この目的でアルバイトをしていた学生がどの程度存在し、そこにはいかなる推移が観察されたのか、といった動向については確認しようがない。ただし、学生援護会などの調査をもとにすれば、少なくとも92年以降、アルバイト目的として「社会勉強のため」という理由をあげる学生が増加し、90年代後半期には、「小遣いを増やすため」という理由についで、第2位のアルバイト目的にのしあがってきた、とされる[3)]。ここで問題になるのは、「社会勉強のため」にアルバイトをしている学生とは、はたしてどのような特徴をもったグループなのか、といった点である。

アルバイト生活の重視は、学生の本分である学業の妨げになっている、などといった非難に代表されるように、とくに大学教職員を中心として、学生以外の人たちからは、アルバイトは社会的にマイナス・イメージでみられることが多い。このような非難に対して学生の立場からすれば、単なる「小遣い稼ぎのため」とは異なり、「社会勉強のため」にアルバイトを行っているといった論拠は、アルバイトを正当化し、擁護する大義名分となりうる。そこには、大学で教えていることは役に立たないといった批判とも呼応して、大学では学ぶことができないものを学んでいるのだ、という言い分を含んでいるからである。

もちろん、「社会勉強のため」のアルバイトという大義名分が、学生の言い分を越えて一般的に正統性をもつかどうかは、「社会勉強」が意味する内容によって、判断されるものであるにちがいない。しかし、今回の調査では、この点にまで踏み込んだ質問は含まれていないので、その判断を下すことはできない。だとしても、それに歩を進める前段階として、「社会勉強のため」と答えた学生グループが、「小遣い稼ぎのため」と答えた学生グループに比べて、どのように異なる特徴をもつ集団であるのかを明らかにしておくことは、無意味ではないと考えられる。

なぜなら、心理学の認知的不協和理論を適用して考えれば、「社会勉強のため」といった理由は、アルバイトをしている学生たちが、単に自分の行為を自己正当化するための言い訳として用いられているにすぎず、その内実は「小遣い稼ぎのため」のアルバイトと何ら変わらない可能性もある。つまり、「社会勉強のため」は、社会的望ましさを測っているにすぎない可能性も存在するからである。

2．アルバイトの浸透度

今回の調査では、「学業・勉強」、「ダブルスクール」、「サークル・部活動」、「アルバイト」、「趣味」、「友人との交友」、「異性（恋人）との交際」の７つの項目について、それぞれが「現在の生活の中で、どの程度の比重をしめているか」を、「大部分」、「かなり」、「少し」、「ほとんどなし」の４段階で答えてもらっている。

最初に、そのなかから「学業」を取り出し、学業重視度とアルバイトの関係をみてみよう。なお、ここでは、現在の生活のなかで学業が、「大部分」、「かなり」の比重をしめていると答えた学生を、それぞれ「学業最重視派」、「学業重視派」と呼ぶことにする。表１は、学業重視度別に、「普段の日（平日）」に各活動を「どのくらいしている」かをみたものである。まず、当然の傾向として、学業重視度が高まるほど、「授業の予習・復習」、「授業以外の勉強」、「読書」といった、「勉強・教養の蓄積」に投資する時間が増えている。それに対して、「アルバイト」、「テレビ」、「パソコン」、「携帯電話」に消費する時間は、少なくなる傾向がみられる。「携帯電話」に費やす時間も減少する点は、携帯電話の使用が、遊びと結びついていることを示唆していて、興味深い。

表１　学業重視度と生活時間

学業重視度	アルバイト	授業の予習・復習	授業以外の勉強	読　書	テレビ	パソコン	携帯電話
大部分	114.0	66.9	61.7	45.0	99.4	71.6	50.0
かなり	160.0	40.5	33.0	41.5	103.5	63.3	57.3
少し	182.9	18.0	21.7	28.1	113.6	52.0	66.4
ほとんどなし	171.1	5.0	9.6	24.4	108.6	53.0	64.0
合　計	164.1	32.8	30.7	35.6	107.3	59.2	60.3

ただし、表１に示したアルバイトの従事時間は、それをまったくしていない学生をも含めた平均にすぎない。だから、その数字は、アルバイト従事率の高低によって、かなり変動する。そこで、授業期間中に定期的にアルバイトをしている学生に限った、アルバイト従事時間の実額平均を示したものが、表２である。この表では、「学期中に定期的に」アルバイトをしている学生の比率、およびそれに「長期期間中（夏・冬・春休み）のみ」、「学期中に不定期に」、「長期期間中も学期中も」アルバイトを行っている学生を加えた、「アルバイト従事率」もあわせて表示してある[4]。まず、それをみても、学業重視度が高まるほど、「アルバイト従事率」、「授業期間中の定期的アルバイト従事率」は、ほぼ減少する傾向がみられる。また、アルバイト従事時間・収入の実額平均についても、同様の傾向が認められる[5]。

表2．学業重視度とアルバイト従事形態、時間、収入の実額平均

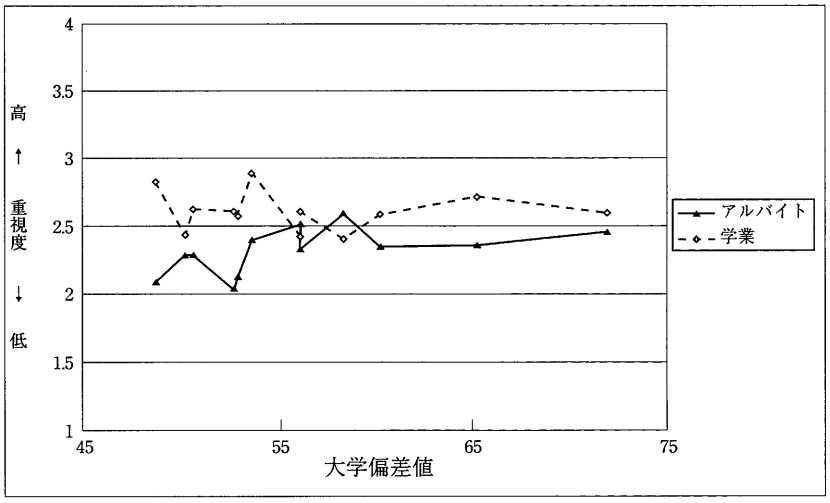
学業重視度	アルバイト従事形態		1日当たりのアルバイト従事時間（分）	月当たりのアルバイト収入額（万円）
	臨時のものを含む	学期中の定期的な		
大部分	86.4	21.3	118.2	3.8
かなり	87.6	26.1	190.7	4.4
少し	90.2	25.2	213.5	4.9
ほとんどなし	87.4	27.2	198.0	5.7
合　計	88.5	25.2	192.7	4.6

しかし、ここでとくに注目したいのは、つぎの2点である。第1に、表2のアルバイトに関する実学平均を基準にして、表1に示した他の活動に対する数字と学業最重視派については、学外ではまだ「アルバイト」に費やす時間より、「勉強・教養の蓄積」に投資する時間の方が長い。けれども、学力重視派になると、すでにその関係は逆転する。第2に、その学業最重視派でさえ、平日には平均2時間程度のアルバイトに従事しており、4万円ほどの稼ぎを得ている。こうしてみると、学業を重視している学生のなかにも、アルバイトは日常的な活動として、広く浸透していることが分かる。

つぎに、「学業」と「アルバイト」の重視度について、今回サンプルとした12大学ごとに平均値を算出し、それと各大学の偏差値との関連を示したものが、図1である。なお、図の数値は、1～4の振れ幅で、値が高くなるほど、その活動に対する学生たちの重視度が高いことを表している[6)]。

図をみると、まず、アルバイト重視度が学業重視度を上回っている大学が2校みられるものの、全般的には、アルバイト志向より学業志向が上回っている。ただし、多少のばらつきは観察されるとしても、大学の偏差値ランクにかかわらず、どの大学でも、アルバイト志向度の強さは、ほぼ同程度である。逆の言い方をすれば、偏差値ランクの高い大学にも、そうでない大学なみに、アルバイト文化が浸透していることになる。

また、今回の調査では、アルバイトをする理由についても、(1)「小遣いを増やすため」、(2)「生活費のため」、(3)「社会勉強のため」、(4)「仕事に興味があるため」、(5)「みんながやっているから」、(6)「時間があるから」、(7)「なんとなく」、(8)「その他」のなかから、1つだけ選択してもらっている。そこで、これについて、図1と同様の形式で表示したものが、図2である。なお、(5)～(7)に関していえば、大学別にみた場合に、それぞれ単独の項目としては最大でも6％未満と、回答が極めて少なかった。そこで今回は、以下、これら3項目を合わせて、「消極的理由」と名づけておくことにした。ただし、その合計でみても、最大で7％を切るため、図2では(8)とともに割愛してある。



注）大学偏差値については、学習研究社の『大学受験案内』をもとに算出してある。

図１．大学偏差値別にみた学業重視度とアルバイト重視度

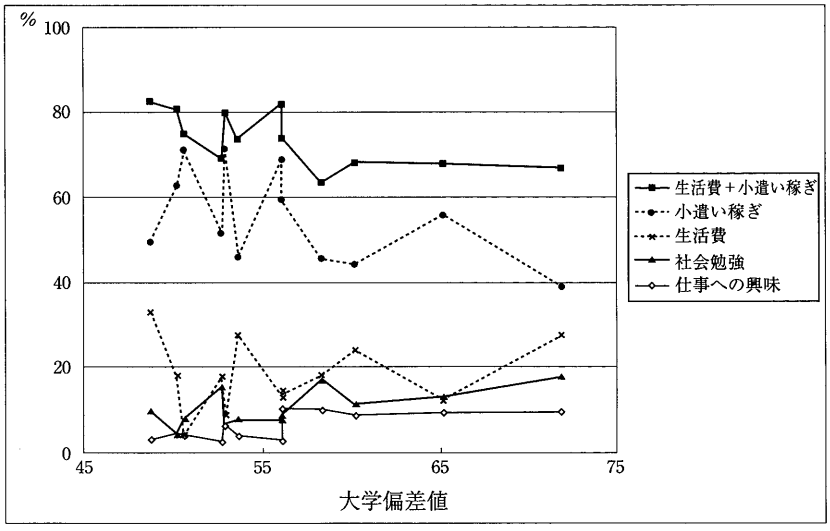


図２．大学偏差値別にみたアルバイトをする目的

まず、(1)「小遣い稼ぎ」に注目すると、その比率がもっとも高い大学と低い大学で、30%程度の落差が存在するほど、かなりのばらつきがみられる。ただし、図をよくみると、(2)「生活費」についても、大きなばらつきが観察されると同時に、(2) が多い大学ほど、(1) が少なくなる関係があることに気づく。つまり、これら２つは、ともに「経済的理由」に属する項目であり、大

学間にみられるそれらばらつきは、回答者がどこまでを小遣いと考え、どこからを生活費と考えるかの差を、反映しているものと推測される。だから、図に追加的に示しておいたように、それらの合計を「経済的理由」として一括りにまとめてみると、大学間のばらつきは、かなり縮小する。ただし、偏差値57をさかいに、それより上位グループの大学の方が、下位グループの大学に比べ、「経済的理由」の比率が10%ポイント程度、少なくなる傾向は観察される。いずれにせよ、すべての大学で「小遣い稼ぎ」が、最低でも約4割をしめる規模で、最大のアルバイト従事目的になっていることは事実である。

一方、1990年代後半期以降、増加傾向にあるとされる (3)「社会勉強」については、大学偏差値による差異は観察されず、ほぼ横ばいとなっている。図では割愛した「消極的理由」についても同様である。また、(4)「仕事への興味」については、偏差値52.5をさかいに、それ以下の下位大学グループでは3%前後であるのに対し、上位大学グループでは約10%に跳ね上がるという段差が観察される。

いずれにせよ、偏差値ランクの高低にかかわらず、どの大学にも共通して、アルバイト文化、しかも小遣い稼ぎを目的とするものが、大々的に浸透していることだけは、明らかである。

ただし、アルバイトに関する活動状況でも、偏差値ランクによる大学間の差異が、顕著にでてくる項目もある。その一つがアルバイト職種である。図3から明らかなように、大学偏差値ランクが低くなるにしたがって、「家庭教師」(塾講師を含む：以下同じ) の従事率が低下し、それを代替するかのように、「接客・販売」業の従事率が高くなっている。ちなみに、この図をもとに回帰分析を行ってみたところ、その回帰式は、家庭教師でY = 2.12 X − 99.3 (相関係数は0.82)、接客・販売でY = -2.25 X − 197.2 (相関係数は-0.85)、となった。つまり、大学偏差値が1ポイント下がれば、家庭教師の従事比率が約2ポイント減少し、その分が接客・販売に吸収されている勘定になる。「事務職」や「技能・その他」の職については、偏差値ランクによる大学間格差はみられない。

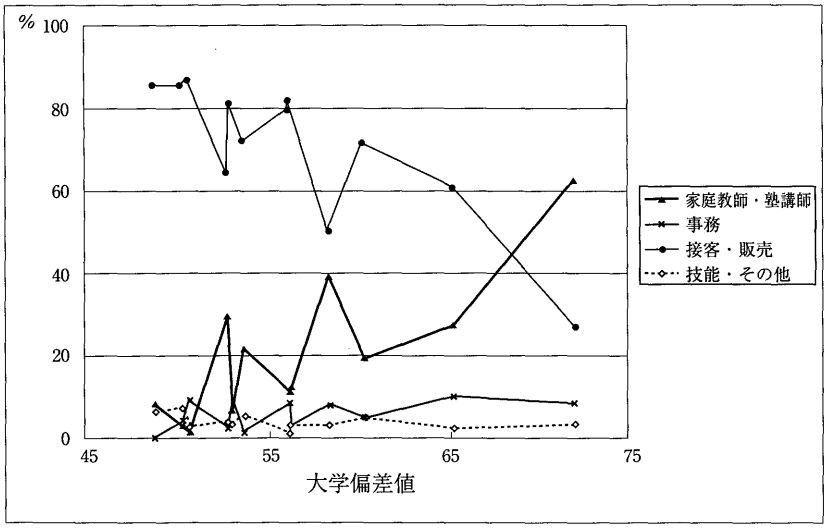


図3．大学偏差値別にみたアルバイト職種

3．アルバイト目的、選択条件、職種の関係

つぎに、アルバイト目的、選択条件、職種の相互関係についてみていこう。まず、図4は、アルバイトをする目的と、その選択条件の関係を示したものである。

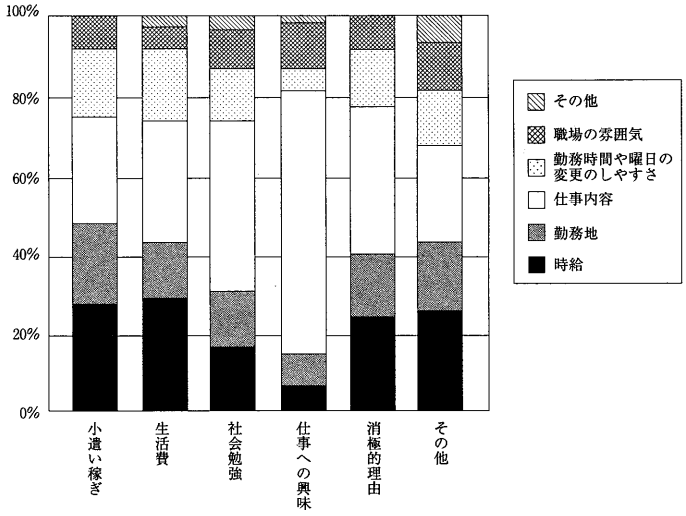


図4．アルバイト目的と選択条件

「小遣い稼ぎ」や「生活費」のためといった、「経済的理由」でアルバイトをしている学生は、アルバイト選択条件としては、「時給」を重視している。一方、「社会勉強のため」、「仕事への興味」といった「社会体験目的」でアルバイトをしている学生は、「仕事内容」を第一として、あわせて「職場の雰囲気」も相対的に重視していることが分かる。そして、「消極的理由」でアルバイトをしている学生は、「仕事内容」も「時給」もある程度重視するといった具合に、「経済的理由」派と「社会体験目的」派の中間に位置している。

なお、同じ「経済的理由」でも、「生活費」派は、「小遣い稼ぎ」派に比べ、「勤務地」をアルバイト選択条件とする学生が少ない。生活費を稼ぐためという緊急の目的のもとでは、「勤務地」を選り好みするような余裕・贅沢はない、という意識が反映されているものと考えられる。

つぎに、図5で、アルバイトの目的と職種の関係についてみていこう。まず、どのような職種に就いていても、「小遣い稼ぎ」が最大の目的になっている。なかでも、その傾向がもっとも強いのは、「接客・販売」業従事者である。さらに、このグループでは、「社会体験目的」でアルバイトをしている学生はもっとも少ない。そして、それとは全く反対の傾向を示しているのが、「家庭教師」である。

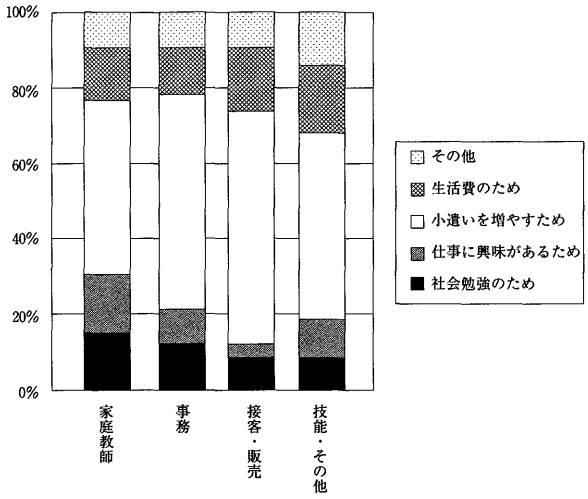


図5．アルバイト目的と職種

4．アルバイト重視度、目的、選択条件、職種と学業の関係

それでは、アルバイトの重視度、目的、選択条件、職種と、学業とのあいだにはどのような関係がみられるのだろうか。この点を、表3で確かめてみよう。

表3．アルバイト・目的・選択条件・職種別にみた生活時間

		月当たりのアルバイト収入(万円)	1日当たりの従事時間（分）						授業出席率(%)	学業重視度
			アルバイト	授業の予習・復習	授業以外の勉強	読　書	テレビ	パソコン		
全体		4.64	164.1	32.7	30.7	35.6	107.3	59.2	81.2	2.61
アルバイト重視度	大部分	7.08	295.7	19.8	28.3	30.0	86.1	53.5	75.6	2.33
	かなり	5.51	240.1	28.5	25.2	32.5	105.1	52.2	80.0	2.58
	少し	3.59	139.4	38.7	34.9	39.7	106.3	60.1	83.1	2.71
	ほとんどなし	1.56	3.7	37.7	35.4	37.7	123.3	72.9	83.4	2.67
アルバイト目的	小遣いを増やすため	5.17	187.8	27.0	26.8	31.9	109.8	53.4	81.0	2.52
	生活費のため	4.49	195.7	34.0	38.3	39.3	104.0	62.6	77.6	2.66
	社会勉強のため	4.42	162.0	42.1	35.9	40.7	104.0	56.4	84.5	2.86
	仕事に興味があるため	4.23	181.9	45.3	42.7	42.9	85.7	82.8	82.0	2.73
	消極的理由	5.13	171.0	28.3	26.5	40.6	103.4	70.4	80.6	2.66
アルバイト選択条件	時給	4.53	187.4	27.2	27.0	34.1	108.0	52.2	79.7	2.57
	勤務地	5.12	200.3	30.9	28.9	36.9	104.2	54.8	80.1	2.54
	仕事内容	4.38	180.1	35.1	35.1	36.1	101.9	63.1	82.9	2.70
	勤務時間や曜日の変更のしやすさ	4.27	175.8	27.6	30.8	31.9	104.0	56.0	80.3	2.58
	職場の雰囲気	3.67	211.3	37.7	29.8	39.8	114.8	58.3	80.9	2.53
アルバイト職種	家庭教師・塾講師	3.71	134.6	45.2	38.0	42.1	89.8	60.9	83.8	2.74
	事務	3.78	158.6	32.5	30.5	42.4	105.0	69.9	82.4	2.72
	接客・販売等	4.95	205.7	27.8	28.5	33.0	108.8	54.7	79.8	2.55
	技能・その他	4.66	124.4	24.8	34.3	36.4	103.5	62.1	79.6	2.71

まず、当然のことながら、アルバイトを重視する学生ほど、アルバイト従事時間が長く、それにともない多くのアルバイト収入を稼ぎだしていることが分かる。その反面、「授業の予習・復習」、「授業以外の勉強」、「読書」といった、「勉強・教養の蓄積」に投資する時間のみならず、学業重視度、授業出席率など、どの指標を取っても、「勉学志向」が減退する傾向がみられる。さらに、「テレビ」、「パソコン」に投入する時間も、減少する傾向があり、まさしくアルバイト中心の生活を送っていることがみてとれる。

つぎに、アルバイト目的別にみていこう。アルバイトをしている学生のなかで、勉学志向が比較的強いのは、「社会勉強のため」、「仕事への興味」といった「社会体験目的」をもとにアルバイトをしている学生である。それに対して、「小遣い稼ぎ」を目的にアルバイトをしている学生は、アルバイトに費やす時間が長くなると同時に、勉学志向が弱くなっている。「消極的理由」でアルバイトを行っている学生についても、アルバイト従事時間が短いことを除けば、同様の傾向がみられる。一方、同じ「経済的理由」でも、「生活費」のためにアルバイトをしている学生は、アルバイト従事時間は最長であり、授業出席率は最低であるものの、学生全体の平均と比べて、学外では「勉強・教養の蓄積」にかなり多い時間を投入しているのみならず、学業重視度も高くなっている。

さらに、アルバイト選択条件別についてみれば、「職場の雰囲気」派は、アルバイト従事時間のみならず、「テレビ」視聴時間も最長であり、学業重視度は最低であるにもかかわらず、「勉強・教養の蓄積」に投資する時間は最大であり、授業出席率も高い方に属するという、いくぶん変則的で複雑な傾向を示している。このグループを除けば、勉学志向は「仕事内容」派でもっとも強く、「時給」派でもっとも弱い。

同様に、アルバイト職種別では、勉学志向は「家庭教師」従事者でもっとも強い。一方、それがもっとも弱い傾向を示しているのは、「接客・販売」業従事者で、アルバイトに投入する時間も最長となっている。

5．アルバイト最重視派のなかでの分化

ここまで明らかにしてきたように、同じくアルバイトをしている学生のなかでも、「小遣い稼ぎ」を目的とし、「時給」を選択条件とし、「接客・販売業」に従事しているアルバイト学生たちに、勉学志向が脆弱になる傾向がみられた。しかし、この傾向は、これらのグループにおいて、アルバイトを重視する学生が多いことが、原因になってもたらされた可能性も考えられる。そこで、その点の影響を排除し、アルバイト目的、選択条件、職種と、勉学志向の強さとの関係を純粋に取り出すために、「アルバイト最重視派」に限って、それらの関係をみたものが、表4である。

アルバイト目的についてみれば、「生活費のため」と答えた学生は、「アルバイト」従事時間がもっとも長い。しかし、「勉強・教養の蓄積」に投入する時間はもっとも多く、「テレビ」をみる時間は最小となっている。つまり、このグループの学生たちについては、授業出席率は最低であるものの、学外では、遊びなどに費やす時間をなるべく少なく抑え、時間をやり繰りしながら、学業とアルバイトを両立させている姿が浮かび上がってくる。

つぎに、「小遣い稼ぎ」派と、「社会勉強」派の学生について比較すれば、前者の方が「アルバ

イト」、「テレビ」の時間が長く、「勉強・教養の蓄積」に投入する時間が少ない。同様の傾向は、学業重視度、授業出席率からも確かめられる。つまり、「小遣い稼ぎ」派のアルバイト学生が、もっとも勉学志向が弱いことになる。

また、アルバイト選択条件についてみれば、「勤務地」派・「仕事内容」派に比べて、「時給」派の、同様にアルバイト職種については、「家庭教師」に比べて、「接客・販売」従事者の勉学志向が弱い傾向が観察される。

表4．アルバイト最重視派のなかでの分化

		学業重視度	授業出席率（%）	1日当たりの従事時間（分）						月あたりのアルバイト収入（万円）
				アルバイト	授業の予習・復習	授業以外の勉強	読　書	テレビ	パソコン	
アルバイト目的	生活費のため	2.7	70.6	316.7	29.7	36.8	39.4	81.4	63.3	7.1
	小遣いを増やすため	2.1	76.7	290.1	11.8	18.5	26.1	95.8	51.7	7.0
	社会勉強のため	2.8	78.6	268.6	28.8	20.2	35.0	80.0	55.7	6.3
アルバイト選択条件	時給	2.1	71.1	307.3	20.8	21.4	34.8	85.6	45.4	7.3
	勤務地	2.4	77.7	296.5	23.5	26.2	32.7	71.3	61.9	7.1
	仕事内容	2.5	79.9	284.3	22.8	39.1	31.9	88.1	61.3	6.6
アルバイト職種	家庭教師・塾講師	2.6	79.1	240.0	19.8	42.6	35.6	68.2	50.5	6.6
	接客・販売	2.3	74.8	309.0	19.7	25.2	28.6	91.9	53.1	7.2

注）度数が20人以下の項目は表から除外した。

6．まとめ

最後に、本稿のまとめを行っておこう。

まず、アルバイトの浸透度についていえば、都市部か地方かといった所在地や、偏差値にかかわらず、どの大学にもほぼ共通して、学生生活のなかに深く根を下ろしていた。さらに、学業を重視する大学生活を送っている学生のなかでさえ、そうでない学生に比べればそれに費やす時間は少ないとはいえ、日常的な活動となっていた。つまり、学生アルバイトは、全国どの大学の、どの学生にとっても、大学生活のなかで大きな比重を占めるようになっているといえる。

しかも、そのなかで最大のものは、「小遣い稼ぎ」を目的とするアルバイトであり、今回の調査サンプル全体の平均でいえば、アルバイト学生のうち実に57.9%を占めていた。のみならず、このような傾向も、全国どの大学にも幅広く認められる共通の現象となっていた。ただし、「生活費」のためにアルバイトをしている学生が、16.4%存在することも忘れられてはならない。また、「社会勉強のため」、「仕事に興味があるため」といった「社会体験目的」でアルバイトをしている学生は、それぞれ10.5%、6.1%、「みんながやっているから」、「時間があるから」、「なんとなく」といった「消極的理由」をもとにアルバイトに関与している学生も、合計で3.2%存在した。

なお、以上がどの大学にも共通した傾向だとすれば、とくにアルバイト職種には大きな大学間格差が認められた。つまり、大学偏差値ランクが低くなるにしたがって、「家庭教師・塾講師」の従事率が低下し、それを代替するかのように、「接客・販売」業の従事率が高くなっていた。

つぎに、アルバイト学生の典型的なタイプを抽出すると、「生活費」のために働いている学生を

第１のタイプとすれば、その他に、大きくいって２つのタイプが確認された。第２が、「小遣い稼ぎ」目的のアルバイト学生であり、「接客・販売」といった手軽に従事できる業種に職を求め、アルバイト選択にあたっては、なにより「時給」が大事と考える傾向を色濃くもつグループである。第３が、「社会体験目的」のアルバイト学生であり、他の学生よりは相対的に、「仕事内容」でアルバイトを選び、「家庭教師・塾講師」を主な従事職種とする傾向がみられるグループである。そして、これら３タイプのなかでは、第２のタイプが多数派を占めている。

さらに、アルバイトと学業との関連については、まず、アルバイトを重視するほど、学業が疎かになる傾向がみられた。しかし、同じくアルバイトを重視する学生のなかでも、先の３つのタイプごとに、勉学志向の強さには差異がみられた。「社会体験目的」という第３のタイプのアルバイト学生には、それほど勉学意欲の低下傾向がみられないのに対し、「小遣い稼ぎ」目的という第２のタイプの学生については、アルバイトに長時間を費やしているという意味で、アルバイト中心の生活を送っているのみならず、勉学に対する意欲が減退している傾向がみられた。一方、「生活費」目的という、第１のタイプのアルバイト学生は、アルバイト従事時間が長く、授業出席率も悪いとはいえ、学外では勉学に対する意欲を保持している傾向がみられた。つまり、まさしく苦学生タイプの学生といえる。

こうしてみると、「生活費」もしくは「社会体験」目的でアルバイトをしている学生グループは、「小遣い稼ぎ」目的の学生グループに比べて相対的に、学業とアルバイトの両立を図っている集団とみなすことができる。

だとすれば、まず「社会体験」目的のグループについては、「小遣い稼ぎ」という経済的目的だけのもとに、漫然とアルバイトをしているのではなく、アルバイトのなかには、大学では学ぶことができないような「社会体験」を修得できる部分があるとみなしている、あるいはそう信じている集団だと考えることもできる。かりにそれが学生たちの偏見・浅慮にすぎないとしても、なぜそのような見方・言説が浸透しているのかは、検討に値する。そして、この点に関連する問題として、大学では学ぶことができないと学生たちが主張する「社会体験」とは、具体的にどのような経験・知識を中身とするものなのか、といった点を明らかにすることは、これからの大学教育のあり方を考えるためにも、今後の課題として重要な観点になると思われる[7)]。

また、「生活費」目的でアルバイトをしている学生グループが、授業出席率の悪さから判断する限り、授業を犠牲にしてまで、アルバイトせざるをえない状況下におかれているのだとすれば、奨学金などとの関連を含めた解析も、今後の課題として必要と思われる[8)]。

注

1) なお、戦後の学生アルバイトの変遷については、以下の文献で詳しく論じているので、そちらを参照されたい。
   ①岩田弘三「アルバイトの戦後社会小史」、武内清（編）『キャンパスライフの今』、玉川大学出版部、2003年。
2) 武内清（編）『12大学・学生調査―1997年と2003年の比較―』、2003年度上智大学・学内共同研究報告書、2004年。
3) たとえば、以下の文献参照。
   ①大島真夫「アルバイト」、前掲、武内清（編）、2003年、P.65。

4) なお、「長期期間中も学期中も」の「学期中にも」のなかには、「学期中に定期的に」行っている学生と、「学期中に不定期に」行っている学生の両方が含まれると考えられる。このなかの前者を加えると、表2に示した「学期中に定期的に」アルバイトをしている学生の比率は、もう少し高くなるはずである。
5) なお、大学別にアルバイトの従事形態、収入額を算出してみたが、そこには幾分のバラツキは存在するものの、少なくとも都市部か地方かといった、その所在地や、偏差値によって、区分できるような明らかな傾向は認められなかった。
6) なお、調査票とは高低の表記の仕方を逆に変えてある。
7) なお、下記①の文献に一部収録されているように、学生に対するインタビューをとおして、社会勉強の中身を問いただすと、(a)「時間厳守」、「挨拶の仕方」、「敬語の使い方」などといった、社会的マナーに関する回答がほとんどであった。それ以外には、(b)「銀行口座の開き方」や「キャッシュカードの使い方」などの日常的な実用知識を学ぶことができた、(c)「お金を稼ぐということ」を体験できた、という答えもあった。
(a)、(b)については、これらはどうしてもアルバイトでしか学習できない社会勉強といえるのか。(c)については、なぜ1回の体験では十分ではなく、アルバイトを長期間つづける必要があるのか。などという疑問に対する十分な答えとは、なっていない印象を受けた点だけ、付記しておきたい。
また、「小遣い稼ぎ」目的のアルバイトについても、学生側の言い分として、親の負担を一部でも軽くするために、遊び関連のお金くらいは自分で稼ぐ目的で、アルバイトしているのだ、とのアルバイト擁護論もあったことを付け加えておきたい。
①岩田弘三「アルバイトと学業はどちらが『社会勉強』になるのか」、『Between』No.206、2004年7・8月号、進研アド、P.27。
8) なお、この点については、本稿で用いたものと同じデータをもとに、すでに大島真夫が、以下の報告書で、一部解析を行っていることを付記しておきたい。
①大島真夫「アルバイト・奨学金」、前掲、武内清（編）、2004年。

付記：なお、本研究は、平成16～18年度 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）「学生生活調査データを中心にみた学生文化の変化動向に関する研究」（研究代表者：岩田弘三）、の成果の一部をなす。